

森の
トトロの
天気予報



よく当たる占いと

占い師の価値観

占いは危険？

今日は「占い」について、原則を知らずに行うと危険である、という話をしたいと思います。

雲黒斎さんのブログ「あの世に聞いたこの世のしくみ」を読んだ方から、先日ちょっと鋭い指摘がありました。「これは事実っぽいものが書かれているけども、でもこの著者の主張がなんなのか、この人が何が言いたいかかわからない。」と言うんですね。だからこそ、この人の文章を受け入れる人が多いとも言えるし、こういう表現方法は「技」でもありますね。

この技は、故意に書いていないことがあったりして、批判されづらいようになっているんです。そのテクニックのひとつが、まず事実だけを知らせてそれを認めさせておいて、「それを知ったら何がしたくなるか」を隠しておく、というやり方です。これは良からぬ団体も実はよく使いますよ。説得力を持たせるためにね。ブログの文章で「自分が何をしたいのか」という思いの部分をはっきり言っていないけれど、読んだ人が「うん、それ合ってるんじゃないか」と思わせるということは、かなり真理に近いからこそできることなのですが、このテクニックを知っていると、「部分的な真実を使った悪い暗示」もできちゃうんです。

このブログを読んだ方の「事実っぽいけど何がいいかわからない」という小さな違和感は、とても大切な警戒心のサインです。これが占いの話に繋がっていきます。

「鬼谷算命学」（きこくさんめいがく）という、とてもよく当たる占いがあります。あれは95%ぐらいの範囲を網羅しているというイメージを持っています。でも、「当たることが人の救いになるか」と言うと、むしろ「当たることで永遠に救われなくなる」ということ、なんとなくわかりますか？

たとえば、100%確実に当たる占い師から、「あなたは明日火事に遭う、その火事は絶対に避けられない」って言われたとしましょう。当たってもまったくうれしくないし、逆に火事を避けることができれば、占いが当たらなかったことになります。つまり、この占いにはまったく救いはないですね。

では、高度な占いの場合どうかというと、そんな直接的なことは扱いませんから、直接的ではない分、一見罪がないように見えるし、害がないように見えます。ですが、実はそうでもなかった例をお話します。

脳腫瘍の持病を持っていたA子さんという人が、占い師から「あなたは、まあとりあえずそのまま行けばいいんじゃない？」と言われました。これだけなら直接的な内容でもなく、罪もなさそうに見えますね。でも実はこれ、本人が思っている以上に、「深い諦めの暗示」にかかっていたんです。

占いの暗示の解き方は、概ね3種類あります。一つ目は、「直接なんと言われたのか」ということがわかっているケースで、「その内容のどこが暗示なのか」を分析して解除する方法です。こ

れは非常に難しい作業です。

二つ目、ほとんどのプロがやっているのが、暗示の上書きです。過去の暗示の範囲を上回る暗示をかけることで、なんとか解除する、逆洗脳とも言います。つまり上書き洗脳です。

もうひとつは、「洗脳ってこうしてかけるんだよ」という事を、「丹田、眉間、みぞおち」にわかるように（頭で理解できるように、心で感じるように、しっかり腑に落ちるように）教えて、すべての洗脳の仕方をバラすんです。そうすると過去の洗脳も解けます。これは僕が、今までたくさんの人を揉んできた中で副産物としてできたもので、今では暗示を解くテキストとして用意しています。この方法で、かろうじて暗示は解けるんですが、そもそもなんで暗示にかかったのかまでは解明できないんです、これだと。だから再発防止にはならない場合もあります。それでも、なにもしないよりはいいという、防御的なものとして生まれました。ただ適用範囲は広いです。

さて、脳腫瘍のA子さんの話に戻ります。もともとの暗示の内容や、どこで深い諦めの洗脳にかかったのか、なかなかわかりませんでした。いろいろと話をしているうちに、少しずつ判明してきました。ある時、A子さんと同じ腫瘍の持病を持ったB子さんと、鬼谷算命学の話をしたんです。「すごく当たるんですよ、人生読まれている！と思えるほど！本当は私の友達に情報を聞いたんでしょ？と言いたくなるくらい当たるんです」と。

占いに頼ってしまう人というのは、テクニックで生きて行こうとする傾向があります。「私は〇〇なタイプの人間だから、〇〇なことに喜びを感じやすく、〇〇にだけ注意して生きていけばいい」みたいな、穏便な方法を教わると、それを忠実に受入れて行動しようとしします。自身のパートナーについても「〇〇なことが苦手な人だから、受け入れていくしかないですね」というように、「まあこれでいいんじゃないですか」、みたいな占い結果を聞かされるわけですね。

よくある占いというのは、お客さんに、「〇〇の時はこうすればいい、〇〇の場合にははこうすればいい」という風に、対処的な方法を伝えます。つまり、自分を成長させる方法を教えるものではなく、自分のタイプをカテゴライズし、テクニックで生きる方法を伝えるものなんですね。それも生きていく上で便利な時もあります。ただ、自分のタイプを決めつけてしまうことで、自分を成長させることや、乗り越える事をみんな諦めてしまうことにもなってしまいますよね。なぜ自分を成長させようよしないのか、なぜ乗り越えようよしないのか、僕は不思議に思っていたのですが、B子さんと占いの話をしていて、気付いたことがありました。

B子さんは、「占いで、〇〇した方がいい」という言い方をされるのはいやだと言います。「〇〇した場合こういう結果になります、△△した場合はこういう方向になります。あなたはどちらを選びますか」という言い方なら、その選択肢から自分がどうするかを選ぶことができるので、そういう言い方をしたいと。つまり、「〇〇した方がいい」という言い方だけでは目的や方向がはっきりしない。「何か行動を起こすことで、こういう結果が出ますよ」、という方向とその選択肢までが示されていなければ、そこに本人の意思が反映されない、ということに気付いたんですね。

あらためてA子さんの話に戻りますが、「あなたは、まあとりあえずそのまま行けばいいんじゃない？」とだけ言われていたわけです。その「いい」がくせ者ですね。

鬼谷算命学で占ってもらくと、「この時期に人とぶつかり合いがある」とか「この時期はテンションが上がるor下がる」とか、そういう細かいしるしが出てきます。鬼谷算命学という学問全体が（本人の考えや占い師の考え方もありますが）「人と折り合いをつけ、流れに乗って、ぶつからずに協調し、小市民的にやっていって、寿命で死ぬ、これがいい生き方なんではないか」、という哲学が背景にあるわけです。

ということは、A子さんの言われた「いい」とは、「この生き方と死に方でいいんじゃない？」という意味にとれるわけです。でも、本来どんな生き方がいいのか、どんな死に方がいいのか、なんてひとつじゃないですよ。 「運命に抗って成長しようとしたり、衝突しようとしても構わずに何かを目指して行った方がいい」と思う人もいるかもしれません。そういう考え、人生哲学を持っている人にとっては、「当たり障りなく、お金がそこそこあって、愛情に恵まれて、仲間がいて、争いを避け、苦しみを避け、平穏な人生がいいですよ」と占い師に自動決定されると、違和感アリアリなわけです。だから占い師の考える「いい人生とはこういうもの、いい死に方とはこういうこと」というのと、近い考え方を抱いていた人にとっては問題はないんですよ。人生の価値観が同じだから。

だけど僕みたいに、「自分のタイプを超えて、全員が究極まで理想を成長させていきたい、簡単に諦めて死ぬのはイヤだし、少しくらいお金があって幸せならいい、みたいなのを乗り越えて、自分の望む本当の目的を達成したい」と思っている人間にとっては、占い師の言う「いい」は全然よくないんですね。価値観がまったく違いますよね。

でも、占い師は価値観を「押し付けている」認識は持っていないでしょう。この価値観ともっとも相性がよかったのは主婦です。「当たり障りなく、お金がそこそこあって、愛情に恵まれて、仲間がいて、争いを避け、苦しみを避け、平穏な人生がいい」と思っている人が多いことは想像できますよね。この価値観は、自分を成長させて、自分のタイプを乗り越えたり、パートナーとの愛情の結晶をもっと乗り越えて、それ以上の答えを目指す事を目標としていない。だから、鬼谷算命学は「成長」についてはわざと占っていないのではないかと最近では思っています。どういう場面で成長し、どれぐらいの幅で成長して、どれぐらいまでなら成長しやすいか、というところまで読まれてしまったら、人はきっと心を閉ざしちゃうよね。

もうひとつ、異常に成長しない人や、非常に不安定なタイプの人がありますよね。それは異常監視という形で現れていると思っているんだけど、いわゆるトラブルメーカーなどと呼ばれる人も、人を育てるための役割を持って生まれた人であったりします。不安定に見える人というのは、運命の流れを変える可能性を持っているんですね。そういう人との縁の組み合わせで状況ガラッと変わるかも、というところまで、占いにもし反映させていたら、（もうそこまでくれば占う意味もないかもしれませんが）鬼谷算命学は95%までは書いてあると思うので、そこから先を書いて欲しかったなと思っています。

過去の占いでこれに似ているものは、四柱推命とか、普通の算命学、さらにはヨーロッパではカバラの算命学もあります。あれらもやはり占い師によっては7～8割当たります。

しかし、たとえば単なる風水でも、何度も引越をせざるを得ない状況に追い込まれてしまう人もいますし、泣くまで「身内が死ぬ」と責めたてたり、「2年以内に名前を変えなければ死ぬ」というような占いもあるようですし、質が悪いものもたくさんあります。悪い占いほど当たると思ってください。

だから、占いが好きな人が気をつけるポイントは、まず「思い込みの激しい占い業者の戯れ言」に耳を貸さないことです。例えば、占いで「彼とは別れるでしょう」と言われたら、人はその「違和感」を抱え続けることで本当に別れてしまうんですね。悪い占いを当てるのは簡単なんです。暗示にかかれば終わり。

いい方に自分のタイプを理解するのもいいけれど、それ以上乗り越える方に持って行くと「占いは当たっていない」という結論になりますね。タイプも当たっていない、運命も当たらない、しかしそれは「当たらない占いの方が、人の救いになっている」ということにもなります。

だから占い師が「〇〇した方がいいですよ」というのは、「こういう生き方と死に方がいいですよ」と言われているのと同じだと思ってください。占い師の人生哲学においてはそれでいいのかもしれないけれど、自分の人生哲学と同じなのかどうか、見極めてから判断してください。

つまり、脳腫瘍のA子さんの、「あなたは、まあとりあえずそのまま行けばいいんじゃない？」を読み解けば、「そのまま小市民で生きて死ねばいいんじゃない？」と言われたということです、簡単に言うと。勝手に人の生き方と死に方を決めないで欲しいと僕は思うんですがね。

何かを教わる時、
教える時に
知っておいた方がいい話

はじめに...

森のトトロは揉み師です。もともと薬屋を営んでいたのですが、調子のよくない人には薬だけでなく、足裏の揉みが効果があるということから揉みを始め、様々な状況や出会いの中で、足裏のみならず様々な療法を研究しています。

トトロの弟子になりたいと意思表示をした人に対して、最初にお話していることがあります。

それは、誰かが誰かに何かを教えようとする時に、知っておいた方がいいことなのですが、

組織（学校から会社、また趣味のサークルまで含め）の中で、人と関わる時にもとても役に立つお話なので、ぜひ最後まで読んでみてください。

まず最初に3つの要点の話をします。

「新しいことを習う時には一度ゼロになる」

「カッコ悪く覚える」

「自分の身体を把握して出てくる自然な言葉で」

トトロに弟子入りする前にこの話を聞いておくと、後々教わった技を忘れてしまったとしても、現場で健全に本能で対処しやすくなります。

言われたことを頭で覚えていなかったとしても、身体がちゃんと反応するので大丈夫になっていくのですが、

この話を最初にしていなかった時代に弟子になった人もいて、そういう人はこの原則がわかっておらず、苦労しているケースもあります。

ちょっと長い話になりますので、

「新しいことを習う時には一度ゼロになる」

のお話は次の記事で。

ゼロになる

さて最初の要点、
「新しいことを習う時には一度ゼロになる」

何か新しいことを習う時に、これまで習ってきたことが邪魔をする場合があるので、一度頭の中をゼロにしてちょっと眠らせておいてください、というお話です。

似たようなものを習う時、例えば空手を習っていた人が、新しく少林寺拳法を習ったりすると、もともとちゃんとできていたはずの空手までおかしくなることがあるんです。

どちらもうまくいかなくなってやめてしまいたくなります。

でも、どうしてもどちらもやめられないような立場や状況に置かれている人は
「資格や免状をとる」ことを目的にがんばってしまうのですが、
それでは実際何も身に付いていないことが多いんです。

別の例で言えば、

クラシックバレエを習った人が別なダンスを習ってみたけれど、
今まで習ったものとまったく違うために、最初に習ったものを守ろうとしてしまう。
それで新しい技術も身に付かず、形ばかり真似した中途半端なものになってしまう。
またもともと覚えていたものまでが、うまくできなくなったりするので、
こわくなってやめてしまうということもあります。

どうしたらいいのかというと、一度眠らせておくんです。

そうすると、新しい技術の要点が発見された時点で、眠らせていたものもよみがえってくるんです。

人は、今まで自分が習ってきたものを否定されたように感じると、
防御的反応をしてしまうんですね。

その時にどう処理したらいいかということをあらかじめ言われていないと
「捨てる」と言われたように感じてしまうことが多いんです。

その防御反応が邪魔をして、前に習ったものとの共通点だけを学ぼうとしてしまうので、
小さなことしか学べないんです。

いい例をお話すると、野球をやっていた人がトトロの揉みを教わった場合、
野球について彼が既に学んだ技術が、
揉みの要点が身に付いた後に野球の要点と結びついて、
野球肘の対処がトトロより上手になったりするんです。
そうすれば今度はトトロがその発見について教えてもらうこともできる。

だから新しいことを習う時には、覚えたものを一旦眠らせておいて、
後から新しく習ったものを怖れずに取り入れて欲しいのです。
すると眠らせておいたものの要点は捨てたわけではないので、
新しい技術の要点が身に付いた時に、うまく結びついて発見があることが多いんです。
その発見を今度はトトロが教えてもらうことで、お互いに技術が向上していきます。
(栗木補足：生徒の方が先生の知らない技術を発見した時に、
それを素直に受け取って、互いの向上を喜べる先生は少ないです。
また生徒も自分の方ができると思ったら、その技術を還元することなく去っていくのが普通で
すね。)

人は、何かを習う時に、今まで覚えた技術を眠らせるのではなく、
捨てようとしたり、共通点だけを覚えようとしたりしやすいんです。
一度眠らせて下さい、一度ゼロになってくださいというと、毎回真っ白になる人も多いです。
仕事が忙しくて予習も復習もできない、
前回教わったはずのことも覚えていなくて、頭真っ白、何も覚えていません、みたいな。
それでいいんです。
ここでは、頭に教えているのではなく、身体に教えているんですから。

カッコ悪く覚える

2 番目の話は

「カッコ悪く覚える」
です。

何かを覚える時に、カッコ良く覚えようとする、
実は本番でカッコ悪いことになるんですね。

トトロに足揉みを教えてくれた師匠（Sさん）の話をしますと、
Sさんが整体の学校に通っていた時、実は一番出来の悪い弟子だったそうなんです。
先生に「わかりましたか？」と聞かれると
「わかりません、もう一度お願いします」と常に言う生徒だったそうです。
しかし最後には、先生に「そういう人の方が開業できる」と言われたそうです。
そりゃそうですね、何回も自分が覚えるまで教えてもらっているわけですから。

だけど皆さんも身に覚えがあると思うのですが、
習っている時に、先生にほめてもらいたくて、
ついわかったふりをしてカッコ付けてしまうことがありますよね。
その時は一見優等生に見えますが、実際には本番でカッコ悪いことになる人が多い。

物事がわかってくると、人はどういう態度になるかのしくみを教えちゃいますと....。

ひとつわかってくると、なにかしら次の質問が湧くわけです。
でも教える方も神様じゃないから、質問に完璧に答えることはできません。
先生からなにかしらの返事はもらえるけど、さらに理解が深まれば、また新たな疑問が出てくる
わけです。
そして疑問が累積すると、とうとう反発に至るわけです。
これが理解した人の態度です。質問～疑問から反発に至るはずなんです。

つまり、
「わかりましたか？」
「はいわかりました」と言う人は
「わかりたいです」ぐらいの段階なんですね。
本当にわかった人というのは、先生に質問があり、
質問に完璧な答えが得られないと、新たな疑問が沸き、
疑問もたまってくると反発に至る、

それは自分の意見が出てくるから。

それが理解した人の態度です。

ところが、習っている人たちが集団行動の中で、

変な仲間意識を持つことがあって、

わかってきた人をみんなで寄ってたかって弾圧し始めることがあります。

「あいつは先生に反発ばかりして態度が悪い」とかね。

それは何かを覚える上では意味のないことですよね。

わかってない人、先生を信奉している人、信者のように妄信するタイプの人は、

派閥や組織を作りたがりです。

僕はそれはやって欲しくないから

「質問～疑問～反発はわかった人の態度だ」と最初に言うわけですね。

そうすると、その後そう言われた記憶は頭になくても

「はいわかりました」的な態度を、僕が好んでいない、

または反発に至った人を弾圧することを僕が好んでいない、

ということが、心や身体の一部に残っていて、変な行動を取らなくなるんですね。

最初に無意識にプレッシャーをかけているとも言えるかな。

カッコ悪く覚えると言ったのには、もうひとつ理由があって

「テキストは現場を持ってからのほうがよい」ということがあります。

テキストで覚えた人というのは、頭から知識として覚えてしまうんですね。

頭から覚えた人と言うのはお客様に対してイヤミにもなるし、

そもそも技術が身に付くのが遅れる。

頭で理解したことしか身体がやっちゃいけないと思い込むんです。

これ、彫刻刀などを持つ芸術などの分野なら、

テキストから入るのは意味が無いとわかると思うんだけど、

揉みも技術職だからね、同じなんですよ。

実際にやってみてからテキストを見る。

そして「なるほど」と思う方がいいです。

頭は身体の助けになるべきであって、頭で身体を縛ってしまうと、

身体がその範囲内でしか動けなくなるのでダメなんです。

テキストを使わなければますます覚え方がカッコ悪くなります。

テキストに答えが書いてあって「はい正解」と言われればスマートですよ。

一見ちゃんとできているように見えちゃうけど、結局は身に付いていない。

だからこのようにテキストで覚えちゃった人は、
整体師の学校に行ってもいい成績をとったとしても開業できません。
体感がないから。
学校中毒と言うような状態になって、
何件も違う学校に通い直すような学校マニアになっちゃう人もいます。
余計にがんじがらめになってしまう。

カッコ悪く覚えることを怖れない人は、
身体に身に付くということがおぼろげでも
「わかりません」を言える。
何回も一度ゼロになる。
質問～疑問～反発という態度も、カッコよくはないですね。
「はいわかりました」と言うのは優等生っぽくて行儀がいい感じがしますが、
それと反対でしょ。
僕はそういう優等生みたいなのを望んでないからね。
だからここに集まっている人たちは行儀がよくてカッコいいとは言えないでしょ？（笑）

（※ここで話を聞いていた人からこんな言葉が）

Yさん：それがカッコ悪いとは思わないけど...

トトロ：ああ、それでいいです！実際にはカッコ付ける方がずっとカッコ悪いの。
僕が言っているのは「自意識でカッコ付ける」方がカッコ悪いということ。
自意識ではカッコ悪いと思う人の方が、傍から見てみるとむしろ自然でカッコいいですよ。

Yさん：何年経っても、年をとっても、大人だからとかも関係なく、
わからないことはわからないと言うことは全然恥ずかしくない、そう育てられたから...

トトロ：それでいいんです、良い教育ですよ。
カッコ付ける方に育てられちゃうと、人間はカッコ付けなくちゃいけないと思い込んでしまうからね。

自分の身体を把握して

前回の「カッコ悪く覚える」話とも関連しているんだけど、接客の基本として、

「自分の身体を把握して出てくる自然な言葉で」

というのが三つ目にあるんですよ。

何かを習う時に、知識を覚えれば良いと思っている人も多いのですが、覚えた知識だけを使って

「あなたの症状は〇〇です」

というように上から言って接客するタイプになってしまうので、

めちゃめちゃ失礼な接客になってしまいます。

イヤミの塊になっちゃうんです。

実はドクターと呼ばれる職業の人たちがそうなりやすいんですけどね。

自分の身体を把握して、それについて自然にわいた感想で接客する、
というのを具体的に言うと、

例えば、僕は喘息を過去にやったことがあるのですが、喘息の人を見るとほっておけないんですよ。人ごととは思えないから。それって自然な行動ですよ。

そんな風に自分の身体をまず把握しておけば、

同じ症状の人を見た時に、上から目線で言うのではなく

「ああそれは大変ですね、そう言う時はこんな方法がよかったですよ」と言ってあげればイヤミにならないでしょ。

研究が先に立ってしまうような「人の身体を調べたい」という知識目的の人に身体を触られたくはないですよ？

だから、まず自分の身体を、体感を持って感じて欲しいんです。

これは、カウンセラーにも同じことが言えます。

カウンセラーの友達がなぜか多いというタクシー運転手さんがいらっしゃるのですが、その人がある時気付いたことがある、という話をしてくれたんです。

「カウンセラーをしている人は、自分の学んだカウンセリング技術で自分をカウンセリングしていない、

自分が学んだ技術で自分をまずカウンセリングすべきだと思う」って。

まず自分にそれをしないで人にするというのは、

自分の心の弱点みたいなもの、間違いを人にコピーしてしまうことになるのではないかと言うんです。

まず自分をその技術とやらでカウンセリングすれば、
それがどんなにイヤミなもので、イヤなもので、
何が足りないのかとか、不足がわかるはずだと。
ドクターもその医療行為とやらを患者に行う前に、
自分や自分の家族に施術すると考えてみてからやって欲しい、
それをしないで第3者に向かってやろうとするから、
ずさんなものになったり一方的なものになったりするんじゃないか、と言われたんです。

僕も本当にそうだと思います。

揉みの技術でもまったく同じことが言えるわけで、
まず自分の身体について把握していない人間が、
他人にあーだこーだ言うのは変だと思うんですよ。
自分の身体ってわかりにくいですよ。
わかりにくいからこそ把握しようとしてみるべきでしょう？
身内を把握しようとしてみる、ぐらいいいですよ。
そうすれば、同じ症状については自然にいけるでしょ？

ただ、そうすると自分が経験していない症状について、
他人に施術できないということになっちゃいますので、
自分が同じ症状を経験していない時は、究極の原因を考えてください。
原因ってみんな同じなんです、堰止まりと蓄積。

「ああ、堰止まりと蓄積ですね。わかります、ぼくもそうでした。」
ということならみんな経験、体験がありますから、誰に対しても言えるわけですよ。
まず自分の身体の中の堰止まりと蓄積を把握して感じる。
すると人の堰止まりと蓄積に対しては、上から目線の知識じゃなく、
体感で「ああ、同じことぼくもあります、ほっておけない」っていうイヤミじゃない体勢で行けるわけです。

知識欲が先に立つ人はここがわからないんだよね。

自分を置いておいて、外側に正解があると思っているうちは、三流のイヤミになっちゃうんですよ。

揉みの話や医療業界だけでなくいろんな業界でそういう人は多いです。

よい師や仲間に縁がなかったんだなと思います。

ひどい状態の人を見て、相手を責める人もいるんだよね「あなたは不幸ですね」としか思わない。

Yさん：私、子供が風邪をひくと自己管理が悪いって怒るの（笑）

トトロ：それはよくある言葉ですね。

でもそれを自分に向けてみたら、自己管理っていったいどうするんだ？

世の中の環境（気温やウイルスなど）については、予知能力者じゃないんだし、誰も管理できないものだ、と思うと答えが変わってくるかもしれないよね。

体感を持っていない上からのセリフというのは説得力がないらしいんです。

机上の空論だということを、言われる子供の方が見抜いてしまう。

まじめな子供は

「僕の自己管理が悪いのかもしれない、でもそもそもどうやったら自己管理ってできるのかな...」

ってある時気付く。

でも言ってる方はそこに気付かないから、そこから親が軽く見られたりすることがある。

それが知識的なものの弱点なんですよ。

僕は知識にもものすごく詳しいと思われているけど、

実は知識の扱い方とか、知識とはなんなのかについての方がもっと詳しいのね。

知識だけそのままだと役に立ちにくい。

すごく使いづらく逆効果になりやすくイヤミで三流になりやすいということが多い。

要するに、手順とかマニュアルとかなしで、体感だけでやってる人が、

一流の（一流という言葉自体がすでにギャグのセリフになっちゃうんだけど笑）自己流になっている人ですね。

目立っている人も目立たない人も含めて、

生命倫理のバランス（三焦五行バランス）が良いことをしている人というのは、

やっぱりすごい自己流なんですよ。

さっきちらっと言ったけど、マニュアルというのは、

人に教える時にだけちょっとジャンプ台として必要かもしれないけれど、

最後は自己流になっちゃいます。自己流になるとゴールなんです。

陶芸職人に例えてみましょうか、同じ職人仕事ですしね。

陶芸を学んでいる弟子が、一生懸命練習して師匠とそっくりな作品を作れるようになったとしましょう。

「よしお前はおれとそっくりな贋作を作れるようになったな、卒業！」

って師匠は言わないでしょ？

それじゃ贋作職人を育てる学校になっちゃいますよね。

判で押したような同じものを作ったら贋作ですよ。

自分流のいい焼き物を作れるようになったら卒業でしょう？

職人仕事っていうのは、同じものを作ったら失敗、贋作職人なんですよ。
なのに世間では、学校で医者 of 贋作職人、偽物の医者ばかり作ってるんですよ。
最初に医学を作った人は本物の医者です。
または自己流にしていた人も本物の医者と言えるけれど、
教えられた答えだけをコピーしてやっている人は医療の贋作職人ですよ。
だから偽物みたいな薄いことばかり。

教師にも同じことが言えます。
自己流の教え方を作らなかった人は、
教師の偽物であって、教師の贋作職人だなと思います。そういう先生が多いですよ。

だから、知識じゃなくて、
自分の体感を持って、自分の感想を持ってから人に感想を持つ、
というのが三番目の要点なんです。
一度ゼロになり、
カッコ悪く覚えて、
知識ではなくて自分の身体をまず把握して、
体感して、自然な感想で、というのがうちの授業の方針なんです。

自分を統合させる

さてちょっと別な話。

ものの見方として、「人をどう見ているか」ということについて
最初にちょっとバラしておきます。

これも授業をする上で重要で、これが「無駄な競争をしない状態」を作るんです。

人間を4つぐらいのタイプに分けます。先にタイトルのものを言っておきます。

「共感系」

「論理系」

「率直系」

「直感系」

「〇〇系」というちょっと不確かな感じのする分け方にしているのにも、
もちろん意味があります。

そもそも人間の性格を4種類に分けること自体が乱暴ですよ。

それぞれの境目にキッチリ線を引くことはできないし、
その時々でいろんな面を持っているのが人間ですから。

それでも敢えて、ここでカテゴライズするのは、

「何かを教わる時に、過去の傷によって学び方が違う」ことを知ってもらい、
仲間同士での余計な諍いに時間をとられないためです。

最終的には「人を性格でカテゴライズすること」の無意味さに気付いていくと思います。

あらためて解説しますと、ひとつ目が「共感系」、

二つ目は共感系の対局にある「論理系」、

三つ目は「率直系」、一見素直に見えて実はやっかいなタイプなのがこのタイプです。

この3種類は「傷の種類」を現してもいます。

そして4つ目が「直感系」。

最初からこういうタイプの人もあるけれど、

普通は最初の三つの傷が癒えてから直感系になります。

ちょっと共感系とも似ています。

(共感系と直感系がどう違うのかは、また後で解説します。)

これを弱点と考えて、4つとも鍛えることができるんです。

人は

「会社での自分」「家庭での自分」「趣味での自分」「友達と遊ぶ時」「恋愛している時の自分

」

などいろいろな性質を持っていますが、
何かものを覚える時にはどれかひとつに偏りやすいんです。
途中から変わる人も稀にいますがね。

何かを教える時には、記憶力を使う教え方と使わない教え方があるんですが、
記憶力を主に使う教え方は、頭でっかちになるばかりで、あまり実践的とは言えないので、
なるべく記憶力を使わない方法を実践してます。
毎回真っ白になってもいいんです。ほぼ記憶していなくても。

例えば足裏の反射区を伝える時に「ここは腎臓の反射ゾーンです」と一度教えたとします。
1週間後に「ここはなんでしたか？」と聞いても覚えていない人も多い。
だけど「ここは腎臓です」って30回も言えば10回目ぐらいからだいたい覚えるでしょう？
そうすれば、いちいち記憶力とか使わなくても、身体が覚えていくんです。
だからカッコ悪いと思っても、覚えていないなら何回でも聞き返してください、
と最初に言っているんです。
これを最初に言っておくと、
「あなた何回言ったらわかるの」っていじめる先輩はいなくなるわけですよ。
教わる方としては気持ち的に楽でしょ？生徒同士のストレスも減るし。

共感系

共感系の人というのは、記憶力を要求しない状態では一番早く覚えます。
そこが長所です。

勘でいけるからスルスルと早く覚えます。

記憶力を要求する教え方だと一番遅い、それが共感系の人の特徴なんです。

共感系の人とは具体的にどういうことかと言うと、
会社に出勤したら社内の人との感情がすぐわかる人です。
誰がイライラしているかすぐ見抜く。

感情がわかる人というのは一見便利そうにも見えますが、
実は深い傷によることが多いんです。
なぜそのような性格が培われたかと言うと、
人の顔色を窺わないと生きていけなかったり、
過去に理不尽な目に遭ってきていたりして、
感情を共感することが得意になってしまうんです。

このタイプの人の短所、というか注意すべき点は、
緊張させたり記憶力を要求すると、能力値がゼロになってしまうことです。
なぜかと言うと、これらの共感系の方は、
理不尽な親だとか目上の人、部活の先輩で
「お天気屋さんで何を言い出すかわからない」
「突然怒られるかもしれない」
というようなタイプの人と過ごす時間が長かったんです。
顔色を窺い続けるしかなかったという状態にあるため、
感情をずっと読み続ける癖がある。
緊張状態になると身体がこわばって頭が真っ白になっちゃうので、
共感系の人に緊張を与えると能力がゼロになる。
常に緊張感があるから、人を信用するのに相当時間がかかります。

ただ一番接客向きです。
人の痛みとか苦しみ、傷がわかる人だから。
共感系を言い換えると
「外からの傷があった人」とも言えます。

このタイプは、組み合わせの悪いパターンで言うと、

狂信者になりやすい。

傷を癒してくれる優しい嘘にだまされやすい。

本当に厳しいいい意見を言ってくれたのと、

一方的に乱暴に人を抑制する人との区別がつかないから、

優しいだけの言葉を信じやすいんですね。

で、狂信者になると手に負えなくなってきました。

この組み合わせについてはまた後で詳しく解説します。

論理系は、共感系の反対です。要するに理屈っぽい人。

この人は記憶力を要求すると一番早く覚えます。

でも、うちでは記憶力を要求しないので一番遅くなっちゃいます。

このタイプはテキストを渡して覚えさせれば早く覚えるのですが、

最初に言ったように、技術を覚えるにはあまり意味が無い。

そこで何も使わずに「自然にこれをこうやって...」と言うと

「なんでやるんですか？」というように、どうでもいいところでいちいち引っかかってくるんです。

しかしこのタイプは最初の初級のことを、

ひとつひとつ「なぜやるのか」と引っかかりながら進むので、

後半にぐっと伸びて技を編み出すことができる。

なんとなくやってきた共感系に比べて、後半の創出力が高い。

引っかかってきた甲斐が出てくるのはずっと後なので、

この人は最初が一番遅いんです。でもそれでいいんです。

こういうことを最初にバラしてしまうと、

誰が早い遅いのコンプレックスがどこからきているのかわかるし、

無駄な競争をする必要がないとわかりますよね。

競争化社会にさせない方法があるんだから、最初にそれをバラしてしまう。

見守っている人、つまりここでは「教える人」ですが、

その人がどう見守っているかをバラしておけば、

組織の構成員はムダな足の引っ張りあいをしなくなるんです。

論理系の人は、

テキストが無い状態で教わる時に、一番遅いということがわかっていれば

ムダにイライラしたりしません。

自分の納得のためにいちいち引っかかると覚えておけばいいんです。

例えば組織にこういうタイプの人がいると、

「あの人はなんでいちいち文句ばかり言うのかしらね」

って煙たがられたりしてやめさせられちゃうこともあります。

逆に、知識を重視する組織に入れば、誰より早く覚えますから

「お前は素晴らしい」とほめられます。

だけど、その行く末は「知識でイヤミな人間」に育ってしまう。

もったいないね、一番覚えるのが遅くてもオッケーっていう風にわかった上で、それを見守る場所なら一番後半に伸びるのに。
こういう人がはじかれて別の思い上がる組織で伸びちゃう。
あまりいいことじゃないんですよね。

こういう人に教える側の問題点、注意点として、
「自然に」とか「普通に」とか言わない、ということがあります。
そう言うと怒り出します。
「何が自然なんですか？」「普通ってなんですか？」って。

なぜ「普通に」とか「自然に」が禁句かと言うと、
共感系の人「外側からの傷があった人」で
緊張させたら能力値がゼロになると言いましたよね。
それに対して論理系の人「自分の内側に傷がある人」で、
いわゆるコンプレックスがある人なんです。
「普通」に「自然」に勝負したら負ける理由がある人です。

例えば僕は色盲なんです、
色がわかる人と普通に何かで勝負したら不利で負けやすいですよ。
そこで知識とか技に走るんです。
例えば自分が背が低いと思ったり、足が遅いと思った時に、
普通にかけっこで勝負したら負けるでしょ？
だから「普通に」とか「自然に」やれって言うのは、
「そんなやり方でやったらオレ負けるだけじゃないですか、なんですかそれ」
ってということなんですよ。
だから負けないために、
裏の技と知恵に走って、近道を見つけるとか、
何か技を使って早くゴールに着く方法を編み出していく。
そういう人に「自然に」とか「普通に」とか言えば怒りますよね。

共感系の人「外からの理不尽の傷」だとしたら、
「中の自分の能力値が足りないというコンプレックスの傷」なんですよ。
傷も学び方も対照的です。
だから論理系の人に何かを教える時には
「普通に」とか「自然に」と言わなければいいんです。
まあこうしてバラしてしまえば言ってもよくなるんですけどね。（笑）

悪く育つパターンも言っておくと

「官僚」に育つとたちが悪い。

論理を用いて自分を守り人を攻撃し出すから。

めんどくさいです。

3つ目の率直系が実はこの職場では一番やっかいです。
一対一の揉みができないんですよ、率直系の人というのは。
率直系の人は暗示にかかってきた人。
外の傷、内の傷ではなく「暗示の傷」というのがあって、
一見「傷」に見えません。

理不尽ではないけれども、戒律がはっきりした両親に育てられた場合に多いです。
よいこと、悪いことの定義をしっかりと設けられて、よいことをしてきた人。
この人たちはどんな教え方をしても、
つまり、知識で教えても、直感で教えても、
記憶力を使う教え方使わない教え方どっちをやっても、
このタイプの4人で勝負したとすれば2～3番で覚えてきます。

長所はというと、生命力が最強。
「体力残ってる人いますか」って聞くと「はい」って手を挙げます。
裏を返すとズルをしても体力を残します。
手抜きの達人です、実際には（笑）。

命令されるのは得意です。
そのため、軍隊や看護や介護のように、
あらためて考えて判断するよりも、
すでに判断され決まっていることを確実に実行することが大切な仕事に向いているんです。
だからこそ一対一の揉みはそのままじゃできないんですよ。

この人たちにも禁句はあるんですよ。
「ダメ」って言われるとどうしていいかわからない。
彼らは自分の動機を捨てて
「正しいと言われてきたこと」をする生活を小さい頃から積んできたんですよ。
だから「正しいとされてきたこと」を自分はしているはずなのに、
誰かからダメと言われると
「私は正しいことをやっているのにダメと言われても困ります」という反応をします。
だから率直系の人に「ダメ」って言うと拒否します。

ただ、目上からだけは「上書き」を許します。
（栗木補足：目上を敬うこと、従うことが正しいと教育されているため。）

目上からの「もっとこうして」とか「こういう風に追加して」とかの指示のみが受け付けられるもので、

「ダメ」と目下に言われても受け付けないんです。

だから、このタイプの人、組織でナンバーワンになってはいけない人です。

師範代ができたとしても、師範はいないといけないし、

社長になったとしても、会長がいないとダメなんです。

ところがね、ダメって言われるとクヨクヨするけど

「こうやればいいんだ」って言うのと立ち直ります。

もしも王様に三人の子供がいて、

共感系と論理系と率直系の3人だったとしましょう。

王様にとってはこの率直系が一番かわいく思えるんですよ。

何か指示すれば顔色を窺うわけでも、反発するわけでもなく

「ハイ！」って行動するし、体力残せって言ったら残してるし、

どんなやり方で教えても論理にも直感にも変調しないで2～3番で覚えてくるし、

そして、三つの傷、

「外からの傷」

「内側の傷」

「暗示の傷」（しばられた傷というべきか...。）

その3つの傷を乗り越えて、最終的になるのが「直感系」なんです。

共感との違いは簡単。

共感は一に感情が読めるだけでしたけれど、

直感は自分に合うか合わないかが基準です。

世間的に正しいとか間違ってるとかそういうことはどうでもいい。自分に合うか合わないかだと。

この人の長所は要点の把握能力が一番高いんです。

教わっていても「ここが要点でしょ？」とすぐにわかります。

ただ教える側の注意点としては、

ゴールから教えないとすぐ授業に来なくなる（苦笑）。

自分に合わないと思うとすぐに来なくなるんです。

コツコツ下から積み上げる、そういうのは苦手なんです。

例えば授業ではいろんな場所をいろんな方法で揉んだ後、

膝裏を緩めればいいと教えるんですけど、

その時に足を上げて伸ばせば膝裏は緩むんです。

で、直感系の人ですね、

最初から足を上げりゃいいじゃん！という発言をした人がいます。

コツコツ揉むより 比較的そういうのが好きなんですね、直感の人って。

ただ、要点がわかるからこそ奥義が欲しいわけで、

コツコツ積んでいった体感というのが苦手な場合のケースですが。

他の3つの傷が癒えて直感になった人はいいいんですが、

生まれながらのものすごい直感系という人もいます。

本当の芸術家とかで、

人の言うことを一切聞かないし、すぐ授業には来なくなる。面白いんだけどね。

ただ、うちの組織はいつしか傷が癒えてみんな直感系になっちゃうんで、

教える側としてもイヤだとは言ってもらえないわけですよ。

また必要があれば来るし、

まあ義理堅く育て連絡をくれる人も中にはいるんだけど、

いつ来るかはさっぱりわからないということも多くて面白いです。

この直感系の人は悪くすると教祖になるんです。

教祖になって狂信者と組んだら組織は滅びるという組み合わせになっています。

暴君（率直系）と官僚（論理系）の組み合わせ、

狂信者（共感系）と教祖（直感系）の組み合わせ、

これがぴったり合った時に、

組織がおかしくなってどうにもならなくなっちゃうというパターンがたまにありますね。

Yさん：全部自分に当てはまるんですが...

トトロ：Yさんは、ものを覚える時には直感系になっているんじゃないかな。

ルートは違うけどいろんな傷を乗り越えて直感になった頃にたぶん僕は会ってるんですよ。

だって自分に合うか合わないかの話をしてますよ。

Yさんがしゃべったセリフをいくつか覚えてますから。

だけどまあ、直感系になったばかりかもしれません。

だから散々その暗示も傷も解けていろいろあった後なのかもしれませんね、

僕が見た時にはもうその状態だったから。

でもまだ新しいやり方でどうやって生きていいのかが、ス

イッチオンにはなっていなかったんですね。たぶん環境かな...

本人は育ったけど、組織の一員だったから、自己流で運転したことがなかったんですね、

マシンは改造されて本人は成長した後だったのに。

このタイプどれも当てはまる気がする人は多いです。

全部の傷を持っている人はいっぱいいます。

でも習う時には結構どれかになることが多いんですよ。

こういうことを学校でわかっている人がいればいいんですけどね。

どうしても「競争させる」方にいっちゃうからね。

教える側がどういう風に見てるかをはじめにバラしてしまう。

すると人は無駄な競争をやめるんです。

自分の中の外の傷、内の傷、縛られた傷が解けて直感に至って、

直感になるということを聞かなそうな人になって、

自分に合うか合わないかで、要点だけ満たされていく。

それでも、他の傷がある人は意外とどれもわかるから、態度は悪くないですけど。

生まれながらに直感系の人ってたまにいます。

そういう人は態度が悪い。才能はあるんですけどね。

自分を統合させるためには、この4つの要点を把握した上で、あと二つ追加で言っていることがあります。

自分の家の絵、庭の絵を描いて下さいという心理テストがありますが、あの「心象風景」を使います。

その家の裏庭に当たる場所に、

「過去に自分が恥ずかしかった時の自分」が、氷付けで埋まっているんです。

これはイメージの話ですが、

心象風景の裏庭から掘り出した「恥ずかしかった自分」の顔を見ることができたら

呪いが解けている、自分の過去の縛りがとれているということなんです。

これが自分を統合させるために必要になってきます。

自分を統合させる要点というのは、

4つのタイプがあることを知り、

恥ずかしい自分が氷付けで自分の心の裏庭に埋まっていることを認識すること。

それをひとりずつ顔を見ていくと解けていくということなんです。

最後に、もうひとつの要点が「師匠」にあたる人。

うちは「師匠」とか「先生」とか呼ぶことを軽く禁止しているんですよ。

言葉狩りをするほどではありませんが。

なぜかというと、

「師匠」「先生」と呼ぶ事によって階級というか

立場がはっきりしてしまいますよね。

階級をつけると伸びが悪いし、お互いに縛りが生じてめんどくさくなるんです。

ただ「弟子」という言葉は使います。弟が兄を超えてもいいからね。

まああるわけですが、そういうことは。

それで「弟」はいいでしょうということで使っているんです。

だから、師匠に当たるのは「自分の身体意識」だと思って欲しいんです。

「しっくり」することを師匠にしてください。

もうちょっと詳しく言うと

「丹田、みぞおち、眉間」を

それぞれ「しっくり、いいかんじ、なっとく」するように、

自分の体感を師匠にして確認していくと、いい認識になります。

以前、揉みの授業の時、
モデルで揉まれている人が「痛い痛い」と言っているのに、
「もっと押してもいいですか？」って僕に聞いた人がいるんですよ。
今、目の前で押されている人が痛がっているのに、
横にいる僕に聞くというのは、おかしいことだと気付かない。
僕が「死ぬまで押していい」と言ったら死ぬまで押すかもしれませんね、この人は。
こうなっちゃおしまいです。
自分の体感で判断できない人間が人の身体を触ったらおかしいことになります。

どんなことでも実は繋がっています。
自分の身体の体感意識を育てることを目指してください。
例えば、右の道を行ったらいいか左の道を行ったらいいか、と言う状況の時に、
「直感で選べ」というと「どうしたらいいかわかりません」となりますよね。
そこで「じっくりする方に行け」というと
「じゃこっち」って意外と決められるんです。

「直感を鍛える」というと、熟語だしよくわからなくなるけど、
「じっくりする」方を選ぶようにしていくと、勘がよくなるんです。
それは身体認識の勘なんですね。
それが自己判断の基本になります。
頭が基準を設け、身体が体感を設けて、どうするかを心で決めるわけですね。
その身体認識を師匠と言うなら「師」にすればいい。
「じっくり」を判断の基準にするということです。

最初に話す理由

これが、弟子になりたいと言う人に、僕が最初に言っちゃうお話です。
整理して言うと、

「一度ゼロになる」
「カッコ悪く覚える」
「知識ではなく自分の体感からの感想で言葉を」

そして、
「自分を統合させるための3原則」
として後半に言っているのが、
「4つの気質」と、
「心の中庭で氷付けの自分の顔を見ると呪いが解けて統合しやすくなる」話。
自分にかけている無意識の縛りのようなものが解けていきます。

そして確認は「自分の体感」「しっくり」「なっとくいく」「いいかんじ」みたいなもので、
「しっくり」を師にするということ。

こういう話を全部先に言っちゃうと、無駄な競争がなくなります。
もちろん必要な競争を否定しているわけではありませんが、
「何回言ったらわかるの?」とか牽制したり、
反発した人をつぶそうとしたりする人って必ず組織にいますよね。
「昨日先生に反発していたあのバカをつぶしておいて
三回言ったらわかるんだって教えておきました」みたいな行動、
そういうのはぼくは徹底的にやめて欲しいのね。
わざわざすごく居辛い場所を作って、
こっちが何倍も生徒に気を使いながら生きていかなくちゃいけないなんて状況イヤですから。
競争して牽制して、どっちが先に覚えるかとか、もう本当にいやなのね。
だから無駄に競争する必要がないように4つの気質を教えるんです。

体感については「自分で判断」すること。
そして恥ずかしい自分は心の中庭に埋まっているからというのは
実は「脅し」なんですよ。
「ちゃんと見えてるからな」という脅しです、これも。

そして、テキストを最初から使わないこと、

カッコ悪く質問、疑問、反発していいこと、

「ハイわかりました」を強要するとか、

先輩がこう言ってるんだから後輩は従うしかないとか、

そういうくだらない空気を一切やらせないという縛りを、

頭では覚えていませんが、心にしっかりザックリと最初に言うんです。

（栗木補足：トトロはこの長い話をもちろんテキストにしません。

ガーッと一気に話してしまうので、聞いている方はぐったりして、もはや頭では理解できません

。これをテキストに起こすのに栗木も何年もかかりました。）

こういう話が通じない人間は、そもそも弟子にしてはいけないんです。

「みだりに師につくな、みだりに弟子をとるな」

という中国の古来の言葉通りです。

だからそういう場合は優しく断らせて頂きます。

断り方、知りたいですか？今まで何人か断ってます。

例えばアロマセラピーとかリフレクアロマをすでに習っている方で、

これは弟子にしちゃいかんと思った場合、

「もう習っているものがあなたにはあるんだから、それを用いて自分流を作った方がいいですよ」

という話をするわけです。

「教えることはない」という表現をしないように見えるけど

「ないよ」と言うんです。

または全然違うものであると伝えます。

「ちゃんと習っていなかったから、リフレクソロジーを習いたい」というような場合、
うちは全然それとは違うから、リフレクソロジー協会のものであった方がいいですよ、と。

あとはデコルテとかアロマとかエステで揉んだり、

ハワイのロミロミに興味があるなら、

それをやればあっという間に自分の店ができちゃうから、

もうやった方がいいよ、という話をします。ひとつのパターンとしてはね。

あとは「ちゃんと覚えたい」の「ちゃんと」が過ぎる人とか、

もうすでに何か覚えたものがあるのに動けないだけの人とか、

いろんな人がいるわけですね。

そういう人には「エール」を送ることにしてます（笑）。

でも僕的に弟子にするのはどうかな？と思ったとしても

「ここでこれをやるしか道がない」というケースの人たまにいますので、
そういう人は残っていきます。他に方法がないんですよね。

そうではなく、自分や家族にもたいした負荷がかかっていないのに、
こんなこと（揉み）をやろうとしたらね、
「ちゃんとしたい」という思いが強くなり過ぎるんです。
ちゃんとだろーがなんだろうが関係ない、
よくなればいいんだ、改善すればいいんだ、
なんでもいいって言う人ならいいんですけどね。

この話は、
「競争とか争いとか牽制とか馬鹿馬鹿しい」って言ってるようなものだから、
普通は話を聞けばやらなくなりますよ。
それでもしそうな人ってのは最初にひっかかるからわかるんです。あやしいって。

普通の場合（教育現場や会社など）ってストレスも多くて苦しいですよ。
人工的にいい環境を作るために、僕は努力を払ったわけです。
最初に「わかってるからな」って脅しておくことでね。
まあ脅さなくてもいいですよ、優しく、まるで賢者みたいに話せばいいんですから。

「教育は脅しよ」ってうちのおふくろはよく言ってたなあ。
「脅し」というのはもちろん言葉の上のジョークでもあります。
ぼくの教育は脅しと癒しだったの。
でも脅さなくちゃいけない時に癒して、癒さなくちゃいけない時に脅しちゃいけないなあと思います。

なんだか道徳的なことを言ってますが、僕は道徳は実は好きじゃないんです。
しかし、実効性があるんですね。
例えば姿勢がよくないと、
「眉間、丹田、みぞおち」がちゃんと機能しないから、
姿勢が良い方が実際身に付くわけです。
だから実効性がない道徳はほとんど廃れていったんだけど、結構残ってますよね。

世間で常識と思われるものは、突き詰めて検証していくと逆の結論が出ることも多いんです。
でも検証したことがない人はなんとなくやってるわけです。
こちらは何倍もの努力を払って検証しているので、
そうすると最初から主張しなくても通っちゃうんです。

まとめ

期間的なものについても軽く話しておきましょう。
最初に「しっくり」を体験して、
一年ぐらい経つと、だんだん「感じてくる」んです。
それが言葉になるには、最初から見て「3年半」かかります。

丹田、みぞおち、眉間について、もう少し解説しておくと、
「丹田=できる」
「みぞおち=感じる」
「眉間=わかる」
と言いい換えることができます。

最初の一年は師匠から「できている」と言われても、
「感じません、わかりません」と思う人が多いです。
この順番は、世の中では
「わからないと感じられない、感じられないとわからないし、できない」
と思わされていますが、実際には、
「できてからそれを感じることができる、でも言葉にできず説明できない」
が当たり前なんです。

ためしに彫刻家に弟子入りして、
彫刻とはなんたるかを「わからないのできません」と言ってみてください。
一日で破門になるから（笑）。
「オレだって何十年も彫刻をやってなんなのかわからないんだぞ」
って言われて終わりですよ。
わかってからじゃないとやる気が出ないなんて、
軽くて軽くてもう人生鼻息で飛ぶくらい軽いです。

そういうことばかりやっている人が多いんです。
重みがあるものなら、できたとしてもすぐには感じないし、
できて感じたとしても、それが言葉になるのは3年半も後です。
それが何かを覚える時の本当の順番です。
だけど、そういう職人的な順番で教えると
「あの会社はちゃんと説明をしてくれない。
コンプライアンスがダメな新人教育ができないダメな会社だから、
私はできなくていいんだ」

みたいな新入社員が増えたの。

そうして一生、イヤミな三流になっちゃうんですよ。

まあ、本当に新人教育がダメだったり、

試用期間内に、新人の親族に商品や契約を売り付けることだけを考えているような会社も最近多いようなので、

そういう状況は、単に受け入れて努力しても苦しいわけで、非常に難しい社会になってきています。

自分の縁と運で出会った体験の全てを、味わって次に繋げるしかないです。

「戦争や訴訟や殺し合い」にならない程度の「争いや摩擦」は、学習の機会としつつ、逃避じゃなく回避して離脱するのがいいでしょう。

逃避と回避を区別することも大切です。

逃避は目的にたどり着かなくてもいいやと思うこと、回避は目的にたどり着くためにすること、なんですよ、実は。

わかりやすく例え話をするなら、

「あなたはドライブをして目的地に向かう途中でした。目の前に地割れのような谷が見えてきたので、あなたはアクセルを踏み谷をジャンプして飛び越えました。」

というストーリー、なんか変ですよ。

「あなたは左右どちらかにハンドルを切り、谷を越える橋がかかっているところを見つけて渡り、目的地にさらに向かいました。」の方が自然ですね。

ところが、橋を探しに迂回したり、一度家に帰って装備を準備しなおしたりすると

「逃げるな、チキン。」と言われるのは日本でも海外でも同じで、

これこそ暗示であり、人を死に追いやる呪縛なんです。

バックトゥーザフューチャー2のラストのネタがこの辺をかすってましたね。

主人公がチキンと言われて行動を変えるシーン。

無理にジャンプしたとして、半々の確率で跳べたとしても、

半分は落ちても逃げずに格好つけたかっただけで、実は逃避ですよ。

逃げたと罵られても、迂回したり準備しなおした人の方が、目的にたどり着くための回避をしたことになります。

本当に逃げていないのはこっちの方ですね。

つまり、格好つけて飛ぶ方が半分は逃避で、

格好悪いように見えても迂回する方が、

実は回避しただけで逃避せず目的にたどり着くかもしれないということは想像できますね。

「チキン」と言われることを怖れて格好つけて無責任な外野に殺されるより、

逃避と回避を区別して生き延びた方がいいですね。

今日の話は終わりとします。長い話を聞いて下さって、本当にありがとうございました～。